

大岡昇平の作品における戦争批判の意味

—「靴の話」「食慾について」の改稿をめぐって—

林 姿瑩

1. はじめに

大岡昇平（1909～88）は昭和20年12月復員し、昭和23年から一連の戦争物を発表した。彼の発表した最初の3年の作品を大まかに分類すると、『俘虜記』¹、「野火」²、「武蔵野夫人」³、『サンホセの聖母』⁴の四つの系列に分けることができよう。『俘虜記』、『野火』⁵、『武蔵野夫人』⁶の三作はよく知られていて評価の高い作品であり、従来の研究も盛んに行われてきたが、発表・創作時間がほぼ同時期である『サンホセの聖母』系列の作品⁷は、従来の研究ではほとんど言及されていない。⁸大岡の戦後の出発として『サンホセの聖母』系列を無視することはできないのみならず、その系列も他の三作の比較対象になり得ると思う。そのため、本稿は『サンホセの聖母』系列に目を向け、その系列の最初に発表された「靴の話」「食慾について」⁹について検討したい。

「靴の話」「食慾について」は最初「靴と食慾」という題で発表され、単行本『サンホセの聖母』で再び現れた。この時「靴と食慾」は「食慾について」と「靴の話」の二篇に分割、改稿された。それだけではなく、その二稿を『大岡昇平全集』¹⁰と比較するとまた幾つかの箇所が改められた。そのため、本稿は「靴と食慾」の改稿をめぐって分析し、大岡の創作意図と創作方法を探究し、あわせて大岡の戦争批

判の意味についても検討したい。

2. 改稿について

2.1 「靴」をめぐる改稿——心理の捉え方

「靴の話」によると、戦場において日本軍にとって「靴」は重要なものである。兵隊の靴は、「ゴム底 鮫皮の軍靴」であり、それは「草によく滑り」、「水を通す」というような粗雑なものである。山中の逃避行で、「軍靴」は既に穿き潰された状態にあるにもかかわらず、兵隊はそんな靴を捨てず、機会があれば倉庫にある「鮫皮で」「予備新品の靴」を盗む。「私」の靴もぼろぼろな状態にあるが、ある日松本という僚友が死んだ直後、彼の盗んだ「新品の靴」はまだ「返納」されていないうちに外に放置され、それに「あたりに人はいない」ため、「私」に持ち帰えらる。

初出と単行本との間で最も多く改稿されたのは、「私」が「新品の靴」を入手した後、「松本の分隊の兵士が…交渉に来た」時に、「私」の心理に関する描写のところである。その時「私」が病床についているので、分隊長は彼らをからかって罵って追い帰してくれる。「五分とはかからなかった」この間、「私」の心理を描く方法は「幾通り」もあると作者は述べ、その「幾通り」の方法を紹介する。¹¹

対照表 I 心理の描き方をめぐる改稿

| | 初出誌『小説界』 | 単行本『サンホセの聖母』 | 『全集』 |
|---|---|---|-----------------------|
| A | 「 <u>枕にした靴は火の塊となつて私の頭を炊かかと思はれた。</u> …、私は分隊の支持を失ふのを、何よりも怖れなければならなかつたからである。」 | 「 <u>(削除)</u> 。…何よりも怖れなければならなかつたからである、 <u>かうして私が靴を持ち続ける以上、僚友は私に悪くはしないであらう</u> 」 | 同 |
| B | 「…、私も人並みでみられることを私はむしろ喜んでゐた。私は死ぬかも知れないと懼れてゐたが、 <u>まだ全然この靴を穿く希望を捨てゝゐたわけではなかつた。そしてかうして私が靴を持ち続ける以上、僚友は私に悪くはしないであらう、と漠然と考へてゐた</u> 」 | 「…、私も人並みでみられることを私はむしろ喜んでゐた。 <u>(削除)</u> 」 | 「…、私も人並みに冷酷でいられること…。」 |
| C | 「…私はたゞ <u>わくわくしてこの苦しい瞬間が早くすぎ去つてくれゝばいゝと思つてゐた。かうして周囲の者のなすがまゝに任せねばならぬ病人の悲哀があつただけである。</u> 」 | 「…私はたゞ <u>(削除)</u> この苦しい瞬間が…と思つてゐた。 <u>(削除)</u> 」 | 同 |
| D | 「…私はその時の私の心を正確に…」 | 同 | 私の心理 |
| E | 「 <u>かういふ情緒だけを分離した描寫では、この時私の枕にしてゐた靴はどこかへ行つてしまつてゐる。</u> 」 | <u>(削除)</u> | 同 |
| F | 「 <u>こう思つた、ああ思つた</u> 」 | 「…、 <u>ああ感じた</u> 」 | 同 |
| G | 「 <u>しかし私が私の経験を物語るならば、私はやはりかう思つた、あゝ思つたと書かねばならぬ。書かねば何も始まらないからである。心理は近代文學の負つた十字架である。その不正確を嘲るは易いが、心理なくて近代的人間はゐない。たゞ彼等はそれを誇つてはならない。</u> 」 | <u>(削除)</u> | 同 |

【A】は靴を所有したい自己のために弁解する内容で、言いわけが二つ取り上げられる。一つは靴を「彼等の前に投げ出したい衝動に駆られたが、結局実行する勇気を欠いた」、もう一つは「靴を持ち続ける以上、僚友は私に悪くはしない」という言いわけである。「靴は火の塊となつて」という箇所が削除されたのは、恐らく靴によって自分の当時の状態を比喻しながらも、「弁解」とはならなくて、削られたからであろう。

同じように、【B】は松本の分隊の兵士が罵られる時に、自分の態度を「シニシズム」として表現するために、「一種陰惨な快感を感じてみた」と「人並みでみられる」とし、後に『全集』で「冷酷でいられる」という表現で十分に表す。ところが、初出誌でその直後に続く「死ぬ」「懼れ」、「靴を穿く希望」という句は、前二句と比べて「シニシズム」的なイメージが弱くなってしまうので、削除された。【B】の最後の「僚友は私に悪くはしない」箇所は、【A】の「分隊の支持」と結びつけることができるので、【A】に移されたわけである。

【C】は自分の本当の心理を「誇張」せずに「正確」に描写すべき段落として、「何も考えていなかった」、時間が「早くすぎ去つてくれればいい」という内容

で構成する。ところが、「病人の悲哀」という句が削除された。恐らくそれは通俗的な感情だと思われやすく、より正確さに徹するためであろう。

【E】は前の「正確に描いたとは思わない」という段落に理由を説明する役割であるが、単行本で完全に削られてしまった。【E】を削ることによって、次の「結局靴だけが事実」という段落を強調する働きを持たせるのではないか。何故なら、いくら説明しても「心理」を正確に捉えて表現するのは困難であり、現実存在する「事実」が心理を左右するキープポイントであるので、それを描くしか正確に表現できないからである。

【G】は作者の文学観を示しているといえよう。全部削られたのは作者の文学観が変わったからではなく、文章が説明的にならないように、しかもその箇所が戦場における事実とは殆ど関係ないので、省いたからではないか。

【D】と【F】を見ると、作者が「心理」に拘っているのは明らかである。他の箇所でも見られ、例えば初出誌での「彼が私の眼付を了解したかどうか私は知らない」という表現が『全集』では「私の心理を見抜いた」に改められた。そして、「事実」を追求しようとする作者の姿勢も対照表Ⅱで傍証される。

対照表Ⅱ 「事実」をめぐる改稿¹²

| | 初出誌『小説界』 | 単行本『サンホセの聖母』 |
|---|--|--|
| H | 船中十日分の甘味品の半分を送った。 | 船中二十日分の…。 |
| I | …、彼は…風邪を得て歸り、一週間で死んだ。 | …、五日で死んだ。 |
| J | 監視班、消火班、整理班などを設けたが、もう一つどう呼んだか忘れてしまったが、戦闘準備をして甲板へ出る班があつた。 | …、整理班、戦闘班などを設けたが、この最後の班は警報と共に戦闘準備をして甲板へ出て、潜水艦と戦ふのを任務とする。 |
| K | 彼等 ¹³ の體は周圍の水と不斷の滲透状態にあるものだといふ真理を體得した。 | …といふ事実を体得した。 |
| L | 食欲と平静の關係に關する私の解釋は例證が足りないといふ人があるかも知れない。 | 以上…私の解釈に、證據が足りない…。 |

【H】は「私」が「支給されていた」「甘味品」を「わが子」へ送ったことに関する記述で、【I】は風邪を引いた池田の死に関する記述である。＜強調＞＜対比＞＜アイロニー＞といった表現上のレトリックがあるが、【H】【I】【J】の場合はレトリックのためではなく、より事実に還元するために改められた。

【K】と【L】ではそれぞれ前後の言葉は差が大きい、改稿によって作者は「真理」「事実」「例証」「証拠」というような言葉に極めて気を遣っていたことがわかる。

要するに作者が関心を持っているのは「靴」ではなく、靴に象徴された戦場の「事実」と、その事実の影響がもたらした一兵士の「心理」である。そのため、作者は一つの事件に対して「私」の心理に関する「幾通り」の描き方によって分析し批評する。「靴の話」の末尾に「『事実』だけが『正しく且重要であった』」と書いてあるように、結局「心理」は「事実」に還元されねばならないという論理に至ったのである。

2.2 「食欲」をめぐる改稿——人間の欲望に関する捉え方

「食欲について」は、「私」が戦時戦後の「老人の食意地」を議論している「中年男」に反対するところから始まり、二人の兵士が例挙されている。一人は池田という「わが友」で、常に俘虜の食糧を狙ったり、いざという時にまず食物を取って食べたり、食物のために何でもする。もう一人は木下少尉という「我々の小隊長」で、料理を残すという軍隊のおきてを無視して全部食べてしまい、或いは自分の夜食のために料理を蓄える。「私」はこれを物語りながら、「食欲と平静の關係」を発見し、最後「食欲のために」「彼等が幸福であつてくれればいいと思つている」。改稿された部分で一番重要なのは「食欲」に関する描き方である。

対照表Ⅲ 「食慾」をめぐる改稿

| | 初出誌『小説界』 | 単行本『サンホセの聖母』 | 『大岡昇平全集』 |
|---|---|--|--|
| M | 老人の意地きたなさは戦時からの食糧難で立證されたい。 | 老人の意地きたなさは戦中戦後の…。 | 老人の食意地は戦時戦後の…。 |
| N | 彼の示した貧慾な行為については、読者も既に諸方面において豊富な例に立會つてをられることゝ思ふから詳細に語るのは省くが、要するに…謙譲な彼が、食物のこととなると…、自分の慾望を露骨に主張して恥じないのである。 | 彼の示した貪慾な行為については、…思ふから詳細に語るのは省くが、…。 | (削除) 食慾行為については、…と思うから彼の示した行為の詳細に語るのは省くが、…。 |
| O | しかも狭い船室での遽だしい準備の隙に、素速くその品物をポケットに滑り込ませる沈着があったのである。／以来私は彼を尊敬した。／しかし…食糧が十分でなかつた時の彼の行動は、あまり尊敬すべきものではなかつた。 | …／私は感服してしまつた。／…彼の行動は、あまり感服すべきものではなかつた。 | 同 |
| P | 私が昨夜の彼のだらしない行動 | …彼の奇妙な行動 | 同 |

【M】は次の文「中年男自体それほど意地がきれいなわけではない」と対照するため、「意地きたなさ」を「食意地」に改めたであろう。【N】では、「貧慾な行為」は一般論的な「食慾行為」に換えられた。それは後の「彼の示した行為」即ち「自分の慾望を露骨に主張」することに対して区別をつけるため改めた。【O】では船で「重大な危険の裡」に警備する時と食糧が足りないときの池田の振る舞いに対して、「私」の態度は「尊敬」から「感服」に変えられた。「尊敬」という言葉は相手の行動に対して表面的な捉え方であるが、「感服」は心から敬服し感心する意味を含んでいると感ぜられる。即ち、「感服」のほうがその衝撃の深さや強さをより強めることになる。

【P】では、就眠中の彼等は銃声を聞いて敵襲と信じ、「急いで…床に伏せた」が、ただ池田は「いつまでもそこにはりついたように立ったままである」。彼のこういう「行動」に対して、作者は「だらしない」を「奇妙」に改めた。それに反して、後の木下少尉のことを物語る場所に「だらしない」という言葉がまた現れるが、改稿されなかつた。¹⁴木下少

尉の「だらしない」とは、彼が将校であるのに、おきてを無視する行為を指している。この二つを比較すると、前者はいざという時における食慾行為の異常さ・不思議さを強調するために「奇妙」に改めたが、後者は単に人間の貪欲や利己心を強調するためにそのまま使つたといえよう。

要するに作者は「食慾」及びその慾望の示した行為に関する言葉遣いを、かなり慎重に取り扱っていた。恐らく作者は「食慾」といった「慾望」を一方向的にマイナスの面に傾けないように表現するであろう。即ち、異常な行動や心理に対して、よりリアルな表現に努める姿勢である。作者の意図は「慾望」そのものを批判するのではなく、戦争の非日常性或いは人間性を歪める本質を批判しようとしているのである。

2.3 「僚友」をめぐる改稿——戦場に於ける人間関係

この二編において、「僚友」「戦友」「同僚」「仲間」といった言葉が用いられる。そして改稿された箇所を検討してみると、言葉遣いに関する箇所もある。

対照表Ⅳ 呼び方をめぐる改稿¹⁵

| | 初出誌『小説界』 | 単行本『サンホセの聖母』 |
|---|--|--|
| Q | 私は死んだ戦友の靴を穿いて戦ふことに… | 私は死んだ僚友の靴を穿いて戦ふ運命に… |
| R | 私の洩らした感想を聞いて傍の俘虜の同僚がいつた。 | …傍にみた俘虜の仲間がいつた。 |
| S | 私は…自分の意見を主張しないことにしてみたが、この時はむつとしていひ返した。／「…どつちが忠義かわからんさ」 | 私は…自分の本当の意見はいはないことにしてみたが、…／「…どつちが戦友のことを思つてるかわからんさ」 |

作者は同じく戦場における友軍であっても違った称呼を用い、そこに作者の「僚友」に対する意識があるといえよう。

二編の内容を全面的に検討すると、「わが友」「僚友」「友軍」「仲間」という四つのカテゴリーに分けられよう。「わが友」は二箇所だけ現われ、門司で「同じ室に起居して」、船上同じく「戦闘班」に属する「池田」のことを指している。特別に「わが友」を使うのは、やはり彼が「私」と一番関係の深い、密接し

ている人のためであろう。

「僚友」という言葉は最も多く用いられ、「分隊を異にしていた」「松本」のことを指し、また「私が靴を持ち続ける以上、僚友は私に悪くはしない」、池田が「僚友の分全部下げて来た」という箇所がある。恐らく「僚友」とは一番広義的に、つまり同じ日本軍の軍人を描くときに用いられる言葉だろう。

「友軍」という言葉は「靴の話」で三つだけ同じ段落で現れる。¹⁶ その段落を見れば、「友軍」という

言葉は「戦友」と同じく「日本軍」を指しているであろう。「仲間」という言葉は「軍隊」の範疇から離れたところで使われた。「通訳として役員の仲間」、「俘虜の仲間」（ある日本軍の水兵）、さらに『サンホセの聖母』の稿で削られた「この仲間は門司にお

ける私の飲み友達であつた。」というこの三箇所しか現れないため、「軍隊」の束縛から解放された時に用いられると推測する。続いて「僚友」を描写することに関する改稿を検討する。

対照表V 「僚友」のことをめぐる改稿

| | 初出誌『小説界』 | 単行本『サンホセの聖母』 | 『全集』 |
|---|---|---|------------------------------|
| T | 彼等がいかにわが分隊長にからかはれ罵られ追い歸されたかはここに記すに忍びない。彼等の分隊長は既にマラリヤで死んでゐたので、兵隊ばかりでは對抗出来なかつた。 | 彼等が（削除）わが分隊長に…、追い歸されただけであつたのはいふまでもない。…死んでゐたので、要するに兵隊ばかりでは結局老練な下士官に対抗出来なかつた。 | …兵隊ばかりでは（削除）老練な下士官に対抗出来なかつた。 |
| U | 私はあきらさまに「君はいい人だが食事だけはつき合わない」といつた。彼は「ふん、どうもねえ」と淋しそうに笑つた。その様子はやはり憎めない。 | 私は遂にあからさまに「…」といつた。（削除） | 同 |
| V | 私は彼等が食慾のために他より幸福であつたらうと推測するのはたゞ私が彼等の幸福を願つてゐるからである。 | …他より幸福であつたと推測するのは、私が彼等が幸福であつてくれればいゝと思つてゐるからである。 | 同 |

【T】は「記すに忍びない」を「いふまでもない」に改めたのは、前者は自分の立場を上位にして彼等を貶めるのに対し、後者は主観を避けて客観的に表現すると感じられるからだろう。そして「老練な下士官」を付け加えて、兵隊における権力構造を一層明らかにする。【U】は「私」に「食事だけはつき合わない」と言われた池田の反応が完全に削られた。その文脈から見ると、作者は「遂に」を加えて相手の反応と「私」の判断を削ることによって、戦場における「食」に関する「深刻な事実」をさらに暴き出す意図がある。即ち、池田はどれほど「食」に執着するか、「私」はどれほど自分の利益を保つか、この段落で味わえよう。【V】では「食慾について」の結びとして作者は、すでに死んでしまった僚友たちが生きていたときに幸せであればいいという願望を表す。改稿された部分は一層「私」の願いを強くすると考えられよう。この結びを通して、作者は「僚友」の持っている欲望の醜さへの批評があり、一方そういう境地に追い込まれた彼らに対する関心や同情もあると感じ取られる。

要するに作者は呼称によって「僚友」のことを把握し、その上お互いの関係に関心を持ち続けた。ところが、同じ敵を有している「僚友」同士でありながらも、「戦場」に置かれた時の人間関係は、やはり「利益」と「権力」によって決められたものであることを示している。そういう歪んだ「僚友」との関係、また僚友間の関係を通して一層戦場における「深刻な事実」——「欠乏」及びその「欠乏」のもたらしたあらゆる人間としての弱さ・醜さ——を指摘したのである。

3. 終わりに——戦争批判の方法と特色

この二編だけから大岡の戦争の批判意識が十分に見られる。以上改稿をめぐって考察してきたように、恐らく大岡は自分に課した仕事は、戦争批判という

ことではなく、戦争批判の上で戦争をどう描くかということであろう。彼は『軍艦大和』¹⁷を紹介し、『連合艦隊始末記』¹⁸や『運命の海戦』¹⁹といった当時のそういう記録文学の流行を批判し、「勇壯調を必要とし」て「感傷的な郷愁にすぎず」、「信憑性に一抹の暗影を投げて」²⁰しまった作品が溢れていることを指摘した。大岡は感傷的主観的な文体を避けて、「信憑性」のある戦争物を追求しようとしたことが窺える。彼はまた自分の「志」を「異常な事件や環境におかれた人間を、出来るだけ日常な観点から考える」こととし、「外部的な事件に動かされつつも、その中に動かないものをつかむ。この作業は当然人間を心理的に見ることを要求します。」²¹と述べている。つまり、彼は戦争という「異常」な経験を「信憑性」のある記録として描こうとし、同時に「日常な観点」から「人間を心理的に見て」「動かないものをつかむ」のである。それに「あまり自分を被害者にしたてたくなかつたもんだから」²²と彼は言い、自分の経験を小説化するとき、それを選択したことがわかる。

要するに、大岡は言葉遣いや表現を何度も改稿して、リアリズムで小説を貫いた。誰かを弁護するのではなく、また感傷的郷愁的に不満をいうのでもない。単に戦争の悪、戦争を起こした国家や軍隊の非を訴えるだけなら、読者に感動や共感を与えず、批判の効果ももちろんない。彼は恐らくそれを相当意識し、盛んに改稿を行ったに違いない。「大岡昇平は、かれ自身をもふくむあらゆる人間に対しつねに批評的だが、しかもそれは、やはりつねに励ましに満ちている批評性なでもあつた。」²³と大江健三郎の指摘した意味が、この二編からも窺われる。自分のものでない「靴」を狙った「私」や、「食物のこと」と「誅斂苛酷」になつた「僚友」や、「脆い靴で兵士に戦うことを強いた」「欠乏のある」国家など、すべて彼の批評の対象となる。それは自分が戦争経験者であつたことをいつも意識していたからである

う。しかし、戦場の「事実」を強調したり僚友の「幸福」を願ったりするところから、彼の前向きな姿勢と「励まし」が認められよう。初期作品によっても、大岡の戦争を批判する姿勢と一貫した創作理念・方法は、この改稿された内容から見れば、着実な成果を出したといえる。

注記：初出稿や単行本という注で説明していない原文の引用文は、全部『大岡昇平全集 2』によるものである。

注

- 『俘虜記』（創元社、1948.12）、『続俘虜記』（創元社、1949.12）があるが、ここでは『合本俘虜記』（創元社、1952.12）を指す。
- 『文体』第三号（1948.12）と第四号（1949.7）に二回で連載。
- 『群像』新年創作特集号から九月号まで（1950.1-9）に全八回で連載（八月号は休載）。
- 『サンホセの聖母』（作品社、1950.6）は最初の単行本。
- 『野火』（創元社、1952.2）は最初の単行本。
- 『武蔵野夫人』（大日本雄弁会講談社、1950.11）は最初の単行本。
- 「出征」「海上にて」「比島に着いた補充兵」「サンホセの聖母」「ミンドロ島誌」「暗号手」「襲撃」「俘虜逃亡」「西矢隊奮戦」「食慾について」「靴の話」「八月十日」である。
- 時には「疎外日記」「歩哨の目に付いて」「出征」が論じられたが、多くは傍証・補助資料として扱われ、本格的な文体論や作品論として論じられることは少なかった。本格的な作品論は、佐藤洋一の「大岡昇平『暗号手』の方法—初期作品の系譜・〈死者〉という身分—」（『国語国文学報』1999.3）、「大岡昇平『出征』の文体—初期作品の系譜と方法—」（『愛知教育大学大学院国語研究』1998.3）、「大岡昇平『靴の話』の言語技術—メタフィクション構造の文体—」（同1997.3）がある。
- 初出は「靴と食慾」（『小説界』一・二月合併号、1949.2）という題で発表され、その内容は更にそれぞれ「靴の話」「食慾の話」というタイトルでつけられて構成された。文末に「<一九四八・十・三〇>」とあるが、単行本以来削られた。そして、本稿では「靴の話」「食慾について」という使い方は『大岡昇平全集』（筑摩書房、1994.10。以下『全集』と略。）によるものである。ちなみに、『全集』の

- 解題・解説によると、「靴の話」と「食慾について」は『大岡昇平全集 2』（岩波書店、1982）を底本にしたものである。
- 大岡昇平『大岡昇平全集』筑摩書房、1994—。以下『全集』と略。
 - 改稿前後を対照しやすくするために、単行本や全集で改めた段落・箇所を【A】～【G】という記号をつけた。また、下線は改稿された部分で、波線は引用者が付したのもの。以下同様。
 - 【K】は「靴の話」の内容で、他は「食慾について」の内容である。『全集』の内容は単行本『サンホセの聖母』のと同じであるため、ここで省く。
 - 「彼等」とは「鮫」のことである。
 - 原文を引用すると、「山へ入って事態が絶望的になっても、私はこのだらしない将校の態度が、平穏な駐屯中と全然変わらないのに気が附いた」。
 - 『全集』の内容は単行本『サンホセの聖母』のと同じであるため、ここで省く。
 - 「何故友軍の靴がいやなんだ。…そういうことをいう奴は、今に友軍が来たらみんなバタイジャ／…その頃レイテの俘虜はまだ日本軍が帰って来る希望を持っていた。…（友軍が来ても糧秣は足りないだらうと経験から予想していたのである）／…どっちが戦友のことを思ってるかわからんさ」（「靴の話」）
 - 吉田満氏『軍艦大和』（銀河出版社、1949）。
 - 高木惣吉『連合艦隊始末記』（文芸春秋新社、1949）。
 - 草鹿龍之介『運命の海戦』（文芸春秋、1949）。
 - 大岡昇平「記録文学について」『全集 14』（筑摩書房、1996.3）。pp.39-40。初出は『夕刊新大阪』第1405号から第1406号まで（1949.12.20-21）。
 - 大岡昇平「僕と”戦争もの”—これから何故「武蔵野夫人」を書くか—」『全集 14』（筑摩書房、1996.3）。p42。初出は、①『夕刊世界経済』第1307号（1950.3.23）、②『産業経済新聞』（大阪）第2716号（1950.4.25）がある。
 - 大岡昇平『戦争—語りおろしシリーズ』（大光社、1970.12）。p143。
 - 大江健三郎「戦後世界につらぬく批評性」『解釈と鑑賞』44-4、1979.4。p37。

参考文献

- 大岡昇平『大岡昇平全集』筑摩書房、1994—。
 大岡昇平『サンホセの聖母』作品社、1950.6。
 大岡昇平「靴と食慾」『小説界』一・二月合併号、1949.2。